土左日記註

下

六邑

森川家圖書記

廿日うみ附てりみふれ給ふまじきの舟ハ
こゑをこゑハ春の海に秋の木の葉しもちゐる
やうなるあるものなれ

しも助辞のうちにもいひ分る詞ハ必しも要し
もりきをいふ皆同し
たほろきれ給ふひまちそてまやあらん風もふけ
ものいそきしきれやし
たほろきハたゝといふ詞なりさきハおほな
らぬ給ふひまとひつおもとかくてるか此比の俗語に
たわろきすしぬとこそつまひすぬのことはゝな

護貞文庫

九曜文庫

てふ事催馬楽とて書とゝめ源氏物語にも
かくさまに入れたるをとり風俗なとにいひける也
詞を理なく思すてはかなる多く今もあるを
かゝる詞をこゝにひとつによりかへれと知るへし
或（後西本作ナシ）説にめやもしと見えたるといへと見えたるを
あはんの詞ならぬを

このあひたにつかはれんとてつきてくるわらはあ
りそれかうたふふなうた
なほこそくにのかたはみやらるれわかちゝはゝ
ありとしおもへはかへらやとうたふそあはれなる

かへらやはかへらやと歌のふしへ
（コノ舟哥ニテハカヘラハヤトサテ章ハチカレケレト上ノ舟哥ニテハ詞ヲカス仍テ是ハ棹哥ノハヤシ言ナルヘシトオホユ若本語ハ帰ラハヤノ意ナルヘケレト必舟哥コトニカクハヤスナルヘシ）

こゝ人々は日和のよきを悦ふ紀貫之は土左國乃
土左のことはおりひとうふく（サルコトハ口ニテモアルヘケレト詞ハ古キ哥ナルヘシ）
かくうたふをきゝつゝこきくるにくろとりといふ
とりいはのうへにあつまりをり
和名抄鳿（和名久路止利）黒色水鳥也
そのいはのもとに波しろくうちよすかちとりの
いふやうくろきとりのもとにしろき波をよすると

このことばなにとにはなけれどもものいふやうに

ぞきこえたるとは

ものいふやうなるとは詞をたくみになしていふ

やうなるぞといふ

人のほどにあはねばとがむるなりと

（舟長舟子ナドノ詞ニテハイトメヅラシムベキ作意ハ黒谷白川隣紫野丹波近ナド云轉句ニ似テ）

かくいひつゝゆくにふなぎみなる人波をみて

下に海の恐しければといふによりてなり

くにゝよりはじめてかいそくむくひせんといふなるは

ことをおもふうへに

土佐の国を出るより海賊の追来るといひあへ

るは貫之ぬし土佐にいませしあひだにおさめけるに

さいは海賊どもをきびしく追捕しけるゆゑの

ひるはそれにむくひせんとてねらひくるなるべし

先人（ゆゑかなし）國果經の上を引出く云る證へ

海のまたおそろしければかしらもみなしらけぬ

なゝそぢやそぢはうみにあるものなりけりと

海賊と海とおそろしきによりて七八十年

の老の時にも勝りてしらくるといへる

おもしろし年よりけるといふは魏の韋仲将といひ

ひし人凌雲臺の額をかきて悉く白髪とな
りしとぞ云は似つかはしき事也
（海ノ恐レキヨリ遽ニ年ノヨルコヽナスルトテ七八十年ハ海ニアルヘキ者ト云ハ浦島子カ事ナト思ヒテ書ルモノカ）
わかかみの雪といそへのしら浪といつれまされりと
おきつしまもるかちとりといへ
萬葉集に八百日行濱のまさごも我恋に豈やまさ
らぬかおきつ島もる此歌をおもひよせたる
なり沖は島もるとハよみつれは島もるもひとつ
ハかちとりをもよ此とらめをいへといふへ楫取共にて
まさるをといへるをいへと四かへらく

廿二日よんへのとまりよりことゝまりをおひゆく
（サレ行方ノ名モ知ラヌカラコト泊トハ云）
はるかに山見ゆ九つはかりなるをのわらは
年よりはをさなくそあるこのわらは舟をこくまに
山もゆくと見ゆるを見てあやしきうた
をぞよめる
あやしきまては句を切へし漢文の例あり
なとに多し九歳をうけたる事也我年より
はをさなき主の事をとらへたるはあやし
此事かなと詞をかゝりしあるなり

こいゝあしくみえてこゝはあれしむかしの山さへ行を
松をもしほやとそ見ゆるをされはハしいのあるまて
ハまつおえしらぬ海ゆかしきまて
風もはよかりしるとか浪の音川もみえてゆかしき
みよしふなまよへし
いかに雪ふりし波の色さへおもひける人のよめる
雪降ハ雪の如くなるものゝたとへしと磯ふり（[illegible]）は
波をいふなり
なにとのいひとへのきけといひこれを雪と花とよ
まつひしなるの歌

古今集に草も木も色はかはれともわたつみの
波の花にそ秋なかりける神武紀に難波を浪
花ともいひしにゝたり

（神武紀ノ本文ニハ到難波之碕会有奔潮太急因以名為浪速国ト云マテ本文ニテ亦曰浪華今謂難波訛也ト有ハ注文ニテ古傳ニアラヌ浪速ノ義ハ古意ニ浪花ノ義ヤヽ後世ノ文ニハアラヌ歟）

廿三日ひてりてくもりぬ
さはし思ふに又早きまさるなり
このわたりかいそくのおそりありといへは神仏を
あをいのる

（便アルキ泊ニハ必海賊ラカ便得ルナリ心ナラヌ泊アリサマ見カ如ク字出タリ）

廿四日きのふのおなしところなり
廿五日かちとりのきたかせあしといへはふねいたさす
されかいそくおひくといふことたえすきこゆ
（此二三日ノ晴曇ノミシテ海ハアラケナルヲ見ルニモカヽル便アシキ泊ニイツマテトカケリ舟出セハヤト云ヘル檝取等カ北風ノアシキ由ヲ云ニソ凪ノコヽロヲ知ヌニハ黙シテ今日モ暮スナリ）
廿六日まことにやあらんかいそくおふといへは夜
なかはかりより舟を出してこきくる
（猶風ハヨカラ子ト海賊ノ追慕ヒクルトノミ云ヲ此ニハ人〻ワリナク檝取ニ仰セテ舟ヲ出スナルヘシ心ノマヽ行モ留ルモ安カラスナルヘシ）
みちにたむけするところありかちとりしてぬさ
たいまつらするにぬさのひんかしへちれはかちとり
のまうしてたいまつることはこのぬさのちるかた
にみ舟すみやかにこかしめたまへとまうし
てたいまつる
　萬葉集にあてつる歌あるれわすれ中ぬ
さとるもむけくまやのへてたいともいへていつく
みてものめむけいはさかなる海神をまつる
へしぬさのちるといふはたむけのぬさなるへし
これをきゝてめのわらはのよめる
わたつみのちふりの神にたむけするぬさのおひかせ
やますふかなんとそよめる

道返（チカヘ）しの神ちふりの神なとおもへれハ道觧の神なるへし行道のちふりの神といふなるへきを海路にうつしていへるなり

（チフリノ神ト云神名ハモシ彼海路ニイマス神ニサル名ノオハスニヤ道ノ神ノ名ハ是カレオハスヲチフリノ神ト云名ヲ知ラヌコヽニ私ニテ道觧ノ義以テコトニ設ナレタル名ヲ申スヘクモアラス或人ハ隠岐国ニ知夫利ノ崎ト云所ニ和多須乃神ト云カオハスナレハ其神ヲ奉幣シテ渡リテ祈ルトソ申スフノアルヲ其神ヲ是ヨリ祈ルニヤト云リ一説ト為ヘシサレトコノ哥ワラハノヨメルトアレハサルトヲキ国ノカミノミナヽトヨムヘクモアラスコヽハ神名ノ義ハサシオキテ知不利ノ神ト申ス神ノコワタリニオハスヨシニテ幣奉ラレムル楫取ノ指揮ニマカスルナリト見エテ過スヘキ歟）

このあひたに風よけれハかちとりいたくほこりて舟にほあけなとよろこふそのおとをきゝてわらはもおうなも（或本にをんなも）いつしかとしおもへはにやあらんいたくよろこふ此中にあはちのたうめといふ人のよめるうた

淡路のたうめハ淡路といふ老女にやたゝに淡路みねはいとゝにも同し人なるへし

おひかせのふきぬる時ハ行舟のほてうちてこそうれしかりけれとそ（一本ふきぬる時をゆく舟も）

（帆ノヨコ手ニ縄ヲ多クツケテ右ヘ左ヘヒラカントスル縄ヲホテト云リモノヲヨロコフトキハ手鼓ウチテアソフサマヲ舟ノ帆手ヲカセニウチナラスニソヘテヨメリ）

大人ハ天気とてけとも云
又てけと云でとひく
讀ハ之そてえけといふ
へきをいるかゝハせく
りかへ

ていけのことにつけていのる

或本につけつゝいへるとあり

廿七日風ふき波あらければ舟いださずこれかれ
かしこくなげく
かしこくと云詞ハたゞならずなげくをいふてな
と云心なりとぞおもふ
をとこたちの（或本にこゝろなぐさめにか　うたふとありこれをとる）からうたに日をのぞ
めハみやこ遠しなどいふなることのさまをきゝ
てある女のよめる
日をだにも天雲ちかく見るものをみやこへとおもふ
みちのはるけさ
幼童傳といふふみに晋の明帝をさなき時の父の元
帝長安の使の来たる日と長安といづれか
遠きと問たまへるに長安ハちかし人きたるに
日の遠きハいまだきかずとこたへ給ふ又帝
もろ人を寄として其ねぎ又とはせ給ふに目を
挙れハ日を見る長安の人さらに見えず
仍て日ハちかしもあらたに申させ給ふとぞ
ましと云今ハそれを詞にひきなしてよめるなり
又ある人のよめる
ふくかぜのたえぬかぎりしたちくれば波路ハいと
ゞはるけかりけり

吹風もかきアれなよゝりなれハそよ川波
もかゝりなく
日ひともし風やまんはせはしまりてねぬ
しれうとアしくおき婦河ら風もしきすする
うらくおそろし源氏若紫の巻よつアはしき
そしてうらみたゃふとあり
廿八日 雨もすこし雨もやアんけると
ゐうせもやまきて衣もとりまて明しと之
廿九日 雨共に御うしとてそこのほきせ中くつあい
とおうしなきとかつらもそろそろ

是まてハ日毎よ雨降風ふきて安く人家のさい
とのしたなしいつくんもつゝさうしまうしゝと
てまるまんものしやすふなりて仏の女の事ま
るにぶ院さし事さもおてぬへし
日をうちそふ事ハかふハするひなま事ハさしすけ
松茶村よ出つれ日まて具れ仏才の日にひらしの仏
すとしお仕ほよう家陀伽太郎の説をとそう
うるすのまるなり盆の出れ日を待とあるへし
七月なる事ハしやさの事れ日の事ハひ出ま時をとし
事とはいつとあるとるまハかうしよし ゆる女のうた

七月ハうかゝやかし
むつひなるむつ
まし日の事しい
思ひと信じ

さゝぬーし字誤り
む月ハもとの月之も
皆約もなりむを以
色々せてむ月とふり
とみも此中○む月の
初子の日も此所にて小

ていたせるうた

おほつかなけふは子の日か蜑ならはうみ松をたに

ふひかましものを

松引わたる稽いにしへよし今の此京と成てより有る事なるへしとて今の京家の説子常の
子日ハ日を撰み正月の初子の日ハ日を隔りてひとよのあるへしとはなしといたもあるへし
初の子の日といふことをふるくまよりなすも子の日といふはさもあるへし子の日と
の言ひ入る時ハ日をてなくとて日ハもとよりすへてこれなく む月七日をも子の日ところえてわか
菜つミ松ひく事ハ中古後のさまくにてと後撰集に正月の子のきしめの子の日に松と引あれし日に若菜つむ
ことなん○

うみにて ねの日の哥にてハいかゝあらん

伊勢物語にある後記者の詞とすへくあり

是つらや たゝすや 又よしやあしやなといふ詞

見つけたるふとなすとも いかゝあらんといひ

大人いふよめるといふ詞
少えん写し誤れるなと見ゆ
九日といへと初子の日なるぬ

東路らしうつほあ物語に
れとも此日といふ詞あり
也抄として此日ハそらすのと
ありけれ次の子の日にも
其しに此所にいふなり

いひくわしかしゝと誉めてするなり

又ある人のよめるうた

けふなれとわかなもつますかすかのゝわかこきわたる

るうらになけれはかくいひつゝこきゆくおもしろき

ところに舟をよせてこゝやいつことゝひけれは土佐

の泊とそいひける

阿波の國之鳴門よりちかきあたりと

むかしも土左といひける所にすみける女此ふね○に

まじれりけり

和名抄土佐国土左郡土佐郷あり○

そかいひけらく昔しはしありし所の名たくひそあ
なるあはれといひてよめるうた
としころをすみしところの名にしおへはきよる
浪をもあはれとそみる

昔ト云ヨリ己カ上ヲ物語メキテ昏ナセル文ノ巧ナリ

三十日あめかせふかすかいそくはよるありきせさ
なりときゝて夜なかはかりに舟を出して阿波
のみとをわたる夜中なれはにしひんかしもみえす
をとこ女からく神ほとけをいのりてこのみとをわたる
とらうのときはかりにぬしま（野島）といふところをすく

淡路なり萬葉集淡路のぬしまか崎とあり
たなかはといふところをわたる
これのそは和泉のたな川なり
いそきていつみのなたといふところにいたりぬるに波に似た
るものなし神ほとけのめくみかうふれるに似たりけふ
舟にのりし日よりかそふれはみそかあまりこゝぬ
かになりにけりいまはいつみの國にきぬれはかい
そくものならす
和泉ハ京ちかき國なれハ海賊のおそれもなき乃
かすなしれとも始よりいひくるのうちまてたのしくかふ

大人いはく此迄の海ハ今も
有て南の土佐阿波を經て
くるあたり雲ニ淡路と
又稱てあるよ紀伊國名
草郡をへて和泉の國に
きたるとそ謂之

万葉集の野島此海に
ほとりにつきても疑なきさ
ことまれなかなれハ
玄にいたす

大人云たな川の川口なとさ
して今の堺の浦によるる
ひかりと斗のそのあたりも
淡路とも云ハ万葉集之
黒牛方といふわたりを如
何し

紀ひき川といひしは是也

二月朔日あしたのまゐふりうる雨としきりにやまぬ
雨いひ川そのなごりいふ淀より出て紀海のうらへ
きみ子のかたくに風波ふくれ（或本風波こえれ）くろさ紀乃
松原をつたへゆくところの名をくろく松の色も青
くいろの波をきよみたいくつひのいろをすはうまで
又いろに今ひとつをたらしぬるのおもしろきにつきを
はたのうしといふところまでつなでひきてけり
くろ崎そこの浦和名なるへし和名抄幸彼
（和名豆奈天）挽船縄也

かくてかくわびしきは旅人のよはひなるが
むくしけそこのうしなひたりぬ日をうこと遠く経
かへさしんまる舟君のいたくたの月まで来ぬるに
おもくなるまでくるしきにたへにして人もいふ
ことしてんやつふいつる

んやうとは彼のさんもしといふあのなすえお家
子酒のそてさくろをやみに置きの色やもれ
れひやなとりても同じなり
ひくつみのはるてのなすの紀半の日をよろうい（五十日）のま
てあるへふりせま

十二月廿一日より二月望まで四十五日の
きく人のたりへかやうなるたくひとなるとひそら
ふりあへしふるきゝのからうしてひねり出して
辛労してよみ出せる
よしとたり人ふかうとらえしもころおもひとて
あひついおもひえへえおもひていいそしとく
はしめきそやうぬ

つらゆきていふ萬葉集にかつて塩を取つくしろ
ひとつへ歌を塩をとくひのさく　冷泉源氏物語
帚木にはしまうらすといふを一口つくひき
るやうにうつすありける　はしめのゝくやうなと
いふもはしといひてやゝあまり平出けやく
といふを此諧謔なり
（此奇ノ評ハカリソメナル戯ノミ猶カヽル詞処々ニ見ユルハ物語日記ナト昏ル中ノ又言ナリ）
又そこのは風波きらのかれいとよみぬ
二日あめかせやます日ひとひ夜すから神仏をい
のる
三日海のうへきのふのやうなれは舟いたさす風の
ふくことやまねはきしの波たちかへるこれにつけては
まてもよめるうた

をゝよりてかひなきものはおちつもるなみたのたま
をぬかぬなりけりかくてけふくれぬ

（改正本ナシ）或注云風ヤマテ日数フル事ヲ歎クナリ

四日かちとりけふ風くものけしきはなはたあしと
いひて舟いたさすなりぬしかれともひねもすに波かせ
たゝすこのかちとりは日もえはからぬかたゐなり
けり

和名抄乞丐（かたゐ）かたゐとは道のかたはらにゐても
のをこふ義也械師の日和をえはからぬをそ
しりてかたゐとはいへるなるへし

このとまりの濱にはくさくさのうるはしきかひい
しなとおほかりかゝれはたゝむかしの人をのみこひつ
ゝふねなる人のよめる

かゝれはゝかくあれはを約めていふなり土左にて身
まかりし女児を昔の人といへり貝石なとのう
るはしききよらなるをとりみつけておもひ出さん
事ともなるへし

よする波うちもよせなんわかこふる人わすれかひおりて
ひろはん

萬葉集にいとまあらは拾ひにゆかんすみの江のき

しよるてふさいてひわすれ貝よせなんはよせてこを延

ていつるなり（昔ノ人ノナカヽニワスレタキトナリ）

といへるはある人たえすして舟のこゝろやりによめる

（舟ノ心ヤリトハ舟中ノウサノ心ヤリトスユルナリコヽハ昔人ノコヲ思出テエ堪スシテセメテノ心ヤリマテニ哥ヨメルナレハコノコトハノマヽニテハコトワリカナハスヤウナリコトハナト落タルカ又ウツシアヤマルコトモアルヘシ）

ワすれかひひろひしもせし白玉をこふるをたにも

かたみとたもちんとおもへるなり

わすかりしるを海邊なれはよせくといふ万葉

集に白玉の哥多く貝ハ又白玉もてこ沖津白波

なともあると

大人云萬葉集の此の人ハ白玉をたまと思へハあらにそれとよみしくこの比と並てハそのむそとハ親の目の迷ひをとことわるようくさらに陸たゝう世のうしきるなりさてむすぶにといひて次は死にたかりハよかりきといふとこれは容なるにともいふか

となんいへる女子のためにハ親をさなくなりぬへし玉ならすも

ありけんをと人いはんや

たとへしうしぬる子をもおやのひいきめよと人は

あさけりしなんとなり

（玉ナラスモト云ヒ次ニ顔ヨカリキト云ニテハオトナシキコヲ云ニハアラテ容ノウルハシキコヲ云ノミノヤウナリ）

されとも死し子かほよかりきといふやうもあると

大論といふ書に臨終之時色黒キ者ハ墮ニ地獄ニ赤白端

正ナル者行ニ天上ニとあるとそ死顔よきをよしとす

なほおなしところに日をふることをなけきてある

女のよめるうた

手をひてゝさむさもしらぬいつみにそくむとはなし
に日ころへにける
手をひていてをとひたしてゝ和泉の國の名を
きはくむといはなしに
（寒サハ冷ノ字ノ義ニテ泉ノツメタキヲ云ナリ此泉ハ手テ侵スヿモ冷サモ知ラヌトナリ国名ヲ泉ナレハト云ワクルナリ）
今日からくしていつみのなたよりをつのとま
りをおふ
和泉國日根郡呼唹と云御和名抄に見へたり
又神武紀に雄の水門とあるも和泉なるへし
（今ハ大津ト云所アリ昔ノ小津ニヤ又小津共ニモトヨリ在シニヤ）
松原めもはるゝなりかれこれくるしけれはよめる
（改正本ナシ 苦シケレトハアリシヲ写シアヤマルナルヘシ）
ゆけとなほゆきやられぬは妹かうむをつのうら
なる岸乃松原
妹かうむ麻といひかけたる萬葉よりことをなす也　長
つの浦なる續苧のなす長柄のなとなりて冠
辭なりといひしへ
かくいひつゝくるほとにふねとくこけ日のよきにとも
よほせはかちとりふなこともにいはくみふねより
おほせたふなりあさきたのいてこぬさきにつなてはや

大人云此ハ例のうへつる
發語へたらしぬれ字
の意さそめてたえて
なと云時ハ事をかく
き小むる詞之天とと
いふ假名字なるへし
と云下ハすと論あり字
假名例ふいひ色そて
ふ略す

はやひけといふの詞哥のやうなるはかちとりのおの
のつからのことはなりかちとりはうつたへにわれ
うたのやうなることいふともあらす
うつたへはひとへにと云詞にされともいましこ語解譯
ろしすゑ萬葉集にさかきにも手はふるとふをう
つたへに人妻といへはふれぬものかも又うつたへ
まかきのすかたみまくほり又うつたへあらるはまゝ
みとなしあるいつれもひとへにといふ詞へ
きく人のあやしくうためきてもいひつるかなとて
かきいたせれはけにみそもしあまりなりけり

大人云かさまといふと
乃音をひけはかれなる
ことを加ふるもふとうら
まるひらふ花のまこと
様る是を以てかは置き
しこ古今はうたふの例て
おもふへし

又云鴎さへたに波とみ
らんといふにて皆ま
はの思しらるゝひ目
しみやと云なるへし

な波なたてそと人々ひねもすにいのるしるしありて
かせなみたゝすいましかもめむれゐてあそふところあり
いましのしは助辞（或注ニ乃ノ字ヲイマシト訓ヘト云リ義ハ同シテ語意ハ今ノ乃ノ字ニ當レリ）
みやこのちかつくよろこひのあまりにあるわらはの
よめる
いのりくる風まともふをあやなくもかもめさへた
に波とみゆらん
風間ハ風のやむくれなりふをまふすさてとふとく
なほたしへ多くはやなしは本文の意まそてわろ
ちのあきらかならすかもめさへたにの詞とうやうか

又云石津ハ弟一の高師
乃浜へ今も和泉大丁まて
といふ浜き浜辺あく
浜ちといふハ遠へ行ある
と覚えしは此の立てしけ
んと松林の中に今も
高石もしるふて石はお
るいは是も高師のうち
るかい高石と書くたらし
とよみまんと高の字て
をふきてえはよのま
かへるとおかのいすわ
くうまでかけて上世
大伴氏の領せられし
地ゆゑ大伴の高師とも
大伴のうつしともいへ

らん鴎さへなかり波とよらんの音あやしまれなや
とひゆくひとびとはいつとりところの松もかく
おもしろくてなんすくとほし

和名抄大島郡石津　（上ニ補注ス）

まつすみよしみわたりはされゆく人のよそめに
いろ見てそ我をもおもひぬるすみの江の松ちりされ
よわれはへなるま

住の江の松も年経るものとこそてはおもひつ
るを今見れは我も松ふりまさりけれは我乃
わかもおもひ志るかとし或説ニ貫之ハ元慶八年

高師の浜もはしもは
しかるほとハ峰まで
ひしまと称せ和泉を
おもしろさあく浜
をとふいふかされハも
しかわかえとそし
仏写しも記せしみやそ
まへの末にの雲原め
もはるかなるふれを
遠しろしとハ浜くへん
そるかされてさて水て
へて経清れもさらさく
とよみるさる河遠
さらしと云是へさく
あはれてそれも出あさ
とふいつて

甲辰日うまれおもへはとし五十二歳なりと云り

父祖未詳生誕年何ニヨリテ明ラカニ知ラレケン

さてなむかしへひとのけ

昔人ハ我なるしらの年をいふむかしへハ皆
しへと同しく古をへとらる（へ読てエノ如クトナフ）古を集るむか
しつや今も忘しまはゐるかとよめる
ひと日かたとなわられ称そらよめる
すゝみえるよゐさうしよせくわられ草志ましいさや
よろくへくとなん
※お紫ニ萱草とちくおわすれもなるしつれ

わすれてさて後の世ゑおほくよミおきせつも

詩の注に蘐草合歡食之令人忘憂とあるも

大人云たゞに忘れんとおもはゞうきをさへしのぶるあるを持く試んとくさてかくすらも忘る限りなからん又意乱るゝ時の術をよくつくしてからくさとも上古の草はおぼつかなやしてまことに詩乃注にも蘐草食之忘憂此詩人託言耳憂深者雖日食此草未必忘といへるもさる文も見えし

うはくはわすれなんとすれはつてらひしおもふらち

志のしやめて又もうらふるちからしのせんとするなし

ヒトカタニ忘ハテンナントニハアラス此憂ヲ須臾モワスルヽ物ナラハ試ニトナルヘシサテカクスレト忘ルヽモ限ノアラン又慰乱レタラン肢ノ便ニナルヘキハコノ萱草ナルハト云ニテ上手ノ詞巧ナルナレハキヽ取カタシ

大人云はるゝをこゝろよりつりあてはねとなくこゝろと成ぬるといふこれもしろ見る浪つるひ見そうさをみつくるとあるらもいふべきこ在り後の人のさとく

かくいひてなくさめつくるわひぬる

なからめ長目とおもくあはれりひありておもむきある

見るまゝにまでいふは語のあやをなせり

よくとふべきといふは唯しきとくといふをしとくうるはしくうらぶれ歌ひ寄く新たくしれ後のを事もつくしぬといふはかへりて見るといふべし

時のうつりかはる思ひわかずはあらでいひ出ぬ詞也唯見るまゝと思ふべしされば此と云詞はつくりなす二つとおもふつ詞へなきのめつくといふはさなからあつとせくろとせもそのさまをあらはして○てなからへつくと云べきをそれつ乃詞をうつりかはり○てよくたれ古語の例なり

ゆくへなく風ふきてさけともしまへしるあに

しつきてほとくしくおもあつへし

あくみなくハ日本紀に不意の字をあて思ひ

あるまゝといふる同しほとくしけてくしれと云

と同義なり今も近江の國乃方言（ノニコトハ）に赤子を保てねと

大人云不の字ことなむよいみとれもみな先ハ今の字を見たるべてたとある事し今古事物とぬる同の字とも一義くてそれあとさぬるなふつとてふ義訓さるめひつふめ

今の本に明神とあるハ明神とハ
むかしハあまりかくいはし
て神をも語りて今頭
たゝしき天皇を申
近きころ仮名の明神
と云へり古来
名ある神をハ名神とも
いふ或ハ名神ハ明
神とかけるにて名神の
義なるを後に明神と
書なるならん

云よしへこゝは危殆の字の意にてほとんと云もおなし云ゝ（しりへしりそきてほとんとおちふにおきされの山にひとふのしてひとす しりへトヨメルト同ク後ヘ退キカチニナルナリ）

かちとりのいはく此の住の江の明神ハ例の神
そかし ほしきそあたをすらん

例の神とはいつもほしきそあたをすれハ浪風を起
したまふと云住の江の大神ハ伊弉諾尊のよもつ
くにゝゆきたまひて日向の小戸の橘の檍原にて
み禊せさせたまへる時に化生したまひし大神なり
日本紀に云底筒男命中筒男命表筒男命是即
住吉太神矣（今の本に明神とあるを いふかしくそある）

今考るに神実の神
を明神と申し申古
今とゝて見え延喜
式に名神の字ハあれ
とも明神の字なし
後ろに法乃出る
と云神社の額に明神
の文字ありて比さ
に神社の事をあり
思ひし文法の書と
いふも後の人の作なる
ものなるへし

とハ今めくものか

神も今の世めきてあやしくきこゆるかな

さてぬさをたてまつりたまへといふ（大神ノイカテ今ノ世ノ人心メキテ尓オハスラント云ヘト楫上ノハヤリ幣奉リタマヘト責キコユルナリ）

いふにしたかひてぬさたいまつるかくたいまつれとも波
風やまていやふきにいやたちに風なみのあやう
けれはかちとり又いはくぬさにハ御心のいかねハ
ふ○もゆかぬなりなほうれしと思ひたふへきもの
たいまつりたまへといふ（正本ナシ 神慮ニ足ヘハセタマフヘキ物ヲ奉幣シタマヘトスヽムルナリ）

又いはまくらのひくいはせんとてよなこさむかる川
わきて龍とかはなる鏡をたいまつるとて海にうちは
光つきはいとくらくしされもうちつゞきにうちち
かくのにはかたうぬきは歌人のよめる歌
ちはやふる神のこゝろのあらき波にかゝみをいれて
おつくは家の形
鏡を海に入て即神の御心を見られは早くい
ふかゝへし
いつくすみ江のわたりまくくさしのひめ松なると
いふ神にはゆふれのし

住のいを今をみすしといふは深きりいつくは只に見れいとのと
いて住吉とは云ふなま
ひうかあるへし
住吉と云てもやまうすと
ろえともしつきと云れ
うるめし日吉もひえと
読へきと日のしといふれ
又阿く吉の字をえとよ
て則好井の義はあるく
わるふやしえて女とても
よきおとめをといふえく
吾妻の方言によれと云へ
きとえらとらく

古事紀に墨江とかり萬葉集には清江とかる

いつくは痛ことなるくへ悠清神をわきて菜若の
姫宮ならやられ大名草木の霊をさす神
にはあらしとく葉も本も神といふ神代の心によ
ありて成へし

住ノ江ノワスレ草ノワイフカシムヘキ旨アレトコヽニ言長ケレハ云ス（正本ナシ）

めしうはしうみに神の心をしられま
うつくしは現になりて現に鏡を入て神の御心の
ありなを見んしく

大人云
此段たとふあやしきしれ
諸人是に似たるす紀の云
にいかにてしへにられとして
見きも深なる日紀にある事をいふ人もなくひきぬるは今はわれ神とのことなりてあやしきるとかり
是につきても日本紀の神名の御巻をふるに皇后もらら齋乃宮に神主となりせ給ひてさいつ先主
よ哉まふ神はそれらの神そと問せ給ふ何にいます神又事代神に従ひて住吉のう神れ出名とこと云へなひ
ぬきて神の名の中に西の賊の國をえまる事語も知へる物縛へさるはこうかもちをやふる神の

しかあらはみとよしりんかくいといちてやひるれ大神なるをハしるかりけるさてこゝに住の神そうしはきあたえすらんと舟師ホ云むしより後ゟ侍へる事もあるをそらんにれふなまれハ舟ハはしかなくゆくてそよれあやかるれハ舟師ホハかくいへるなるゟ是をとりし出て守つる人もちへくハ今此世の人心めさゝる事いそれ守らんとうるさひさくされと舟まある限りハから不まちさとふへられハこの寶とせし続を投入しまそる波風の静まりぬるいふみとかしこみほへらしへおよも人いさしみひめねわすれ案るとせし出くいとやさし記名ところにさけるをまかせる神としおもひられぬよるとめしく事ふし合る久ないふるぬかさころいはされおれ神とゆるやせる事なりさあらいくれ文よハ忘ひおつきものそされも荒田東丸乃説のてくいせ西海のそらしことに大神現形しあひて取らみかしかふ頭らんところとしはは陳守氏なとの人のての業をかすさる神てといひるしぬらん彼氏人代ゝおの上手のおしハ神のちるをなとくひそやきしあるしむとつふと荒学者達の論ゝらのよれ究よみ達の此をたとらさんとよいひつしていみしへなるりて此事いくふへるなと

かちとりのこゝろハ神のみこゝろなりけり

楫師カ詞ノ験ナルヲ云ナリ此一段カク験ヲ見ツレド貫之ノ心ニハイフカリシタマヒカルコハアシキ神ノシワサニテコソアレ今現ニシルシアリド住江ノ神ノナシマセルワサニヤアラン海ニハサマ〳〵ノ物住テソレラカナセルナラント疑ノ心ヲ把キテ書レタルカトオホユ

六日みをつくしのもとよりいてゝなにはのつをきて川しりに入る

みをつくしハ水脈津串也續日本紀ニ難波乃姫ゝ澪標を立るとある川尻ハ於はせ之（今ノ川口）

みな人ハおんなおきなひたいにてをあてゝよろこふこと二つなし

おんなハ老女なり和名抄嫗（於無奈）たいとこの中男へおきなハ翁へさいくハ老女も老男もと云へひさひたいをあつるゝ事をいへるあとよろこふ時をけさすかともろさいしの揶揄なと有も同しとかち舟師のあそちみたまれたほいとしやこそちかし

なりぬといふをよろこびてふなそこよりかしらを
もたげてかくぞいへる

おほ淡路のたうめといひし人の名なるべし
め一人ことさらひしくしてとおもふしかるべし

彼舟ゑひのとしたるまへ

又いはく芦漕そけての心を
みつえはの心に今は川
口と淡女人よりあそひ
なくもせしなるべし難
波人からも河後とよぶ
つきるなへ

いつしかといぶせかりつるなにはかた芦こぎそけて
て御ふね○きにけるも

又いぶせかりつるは いぶ
しきとねばつかるかりつる
難波にきたりしとよろこぶ
芦あることをそけていふ その
湊のさまをさふて芦

いぶせかりつる芦の中を漕さはりきてへ

いとおもひのほかなる人のいへるは人ゝあやしかる

（十二）哥ノヨロシケレハナリ

京のいふを紀ふい
あし

これかなかにこゝちなやむふなきみいたくめでて
ふなゑひしたうべりしみかほにはにずもあるかな
といひける

貫之ノ殊ニイタク感賞（メデタマヒツルナルヘシ）アリシナリ

大人云堀江川とはいふの
はとよまるには紀のさ
くみへ仁徳紀十一年十月
堀宮北郊原引南水以入
西海因以号其水曰堀江と
ゐ今ぞとりてされは大
城より東の南よりくる小
渠有是故大和川なり旨
いふ此河内の水と合ふて
流るる大海のりしを
究がたきる川あるを
課て河内の中を堀
さきまで西を指て絶ち
乃南若沼の悟の

七日けふ川じりにふね入たちてこきのぼるに川の水
ひくるなやみわづらふ舟のほることいとかたしかゝる
あひだにふなきみの病者（バウサ）もとよりこちくしき
人にてかうやうのことさらにしらざりけり
こちくしきは骨くしきえ物にかゝもつれな
すくなかるべく

小よりなはありて入しむ色難波の水門よりむかのわちくるゝと阿くらなる国利く従出流の松溪は今なり東南北岸のかさちおもるに次たゆかまじと云ひそからる又十四年十月に為橋於猪甘津号其處曰小橋とも南は小橋といふ故し現東くまのほとり猪甘村を東岸の名をとゞめ小橋は南岸の名今も其地名ありを名れ地の眞太宮なし事ゆるふかきふそのわちさもい小橋といふへきは大橋といふへし又とは大橋とおもしと思ふてとるへしとよそしと音の同しきに係名をひの法則ありて小橋乃家ふほとりあるへし後人のさとさとらもいふへし猪飼野とも猪甘村のあたりをいへしへは堀江の支乃古緒なるへく又四天王寺の南辺りな故堀江口と云里名ありしも其の堀江とハ此もと地図と古書とを思ひあはすに

うきよもあそちのたうめれおよめてこゝやたいほこてきまこゝやあらんかくしくおやしきうらひねていうせふれるのうゝきこえてハ川のほとり江なる水をひきこゝろも家々もなつかしふる事

あまたくていまてかくしくしてきてハとなえ又川のほりえ江の水をあさらせと心ゆつし

舟も我身もともに病者なれハえ

（十二）次ニ病ナスレハヨメルナルヘシ

（十一）堀江川ナレハタヽ倒語ヒテ云ルカ

こゝろれこれハ里の名乃みふきよるる世よ事にうつりたるなるへしこれら乃事此の記にハ用ありれとされれひ此むのことなれハとく言をもいふへけれと

本注　淀路のこなハなかいふを略きてこゝ女の名を行ことゝいふハ此の義にてあらためてこなより出く至絲といふなれと

神注　なかいふと省きて云ハ古の義あるものとより女の名みハ来くぬきわらすことより来ルなされたるハ略すて淀の字よりなふ挙るふよいふへしとてちを兩道とするハ論られ子ある遠く云ふ法て咲ふへし

さもハやまひをとられハよわるなるへし　ひとおり

ことれひる○さいまひとつ

とくとたりふ舟なやますハあふる見よ水のころわれ

わさられするへし

そくと思ふハ都へたより舟なやますハ水の淵を旋え

昔モ此川筋ノ所々浅リテ舟ノ行カタキヲ見ルヘシ

淀路のこなハ巨子をいふ女の名よ行ことといふハ此の義にてあかえいふより出く至絲とハあれり

さいのうらさゝやこゝろうくたりぬるよろこひよたえん

してやふるるへし　わいちのこのおよおと世をねて

又云鳥飼の里今も在[illegible]
[illegible]
牧場なりしにや

大人云今此地図（二カク）にては[illegible]
とりかひの里西面に江口
乃里ありこれいまよ[illegible]

ないはさらましものをとくやしかるうちによるに
なりてねにけり

八日なほ川のほりになつみてとりかひのみまきと
いふほとりにとまる

[illegible]

[illegible]

鳥飼と申[illegible]

[illegible]

こよひふなきみれいのやまひおこりていたくなやむ

（コノフナキミハサキニアハチノタウメノウタナタカリシ君ニテ貫之ノ妻ナルヘシ）

ある人あさらかなるものもてきたりよねしてかへりこ
とすをとこともひそかにいふなりいひほしてもつつるとや

[illegible]

今の[illegible]の字誤なるへし

飯粒は米をとりて魚を釣え鮮魚の代なる故とや

[illegible]

[illegible]

古事記ニ仲哀天皇紀ニ息長帯日賣命抜ニ御裳之糸一以ニ飯穂一為レ餌釣ニ其河之年魚一

かやうの事ところ〳〵にあと

あやしうと思きてたちよりしに

よふせちにすれはいを（魚）もちみれ

せちこのをすてよひけ

九日ころもとなきにゆきぬ

うみより東のゆるみあり

或人ハ舟ノ行ヤラテ心モトナサニト云ナルヘシト云リカリニ夜ノ明ルトアルハ字アヤマレルカ詞足ハヌハサエス此心モトナサハ前日舟居倒ノ病シテト云ナウケテ心持アレケレハ心モトナサニ夜ノ明タルナリト云ナルヘシ心もとなきは舟君の病よふせるをうけていへるなるへし

かくふねをひきて みちきしも

今みち中まそかゝし舟をとゝまるかくの浜なるへし如此

舟を引つなるへし

川の水なかれをみさりよみさされこの河ひとよりされ

とみもの河の土の流ところ〳〵と河を

退散をまちて河の下と云なるへき所なるへし

我津ノ国ニ生レタレハ此ワタリノ地利大カタアキラメタレト此鳥飼ヨリ東北ノ方ニ今ハサルヘキ所ナシコヽニワタノ泊トアレハ海船ノ泊ス所ナルヘシ此川筋イニシヘノマヽナラ子ハ今考ル所ナシアカレノにハ別ノ所ナルヘシ

よゐいをおとゝたいへいたなひけ

おこたひけはいふなるにすなはひやましるをとかる

ふかくなし行みとゐふ事まて儀せるといふなる 遂

大人云けふこの泊のなれ
ぬにぎ来ていと心てかな
らし事なよろこひの
酒まうとする事と
ふるえて来や島とと
つほ行ひつとハ下行
と今もいふ国ふそを
るをとかし行也

さくは川の内なれと川
むかひなるを西めう
こなた入来を二段ニ
なれてこゝにておもふ
まゝなりしされは昔
といふやうはなれり

此ワタノ泊ノ別レノ所ニ来テハ米ヤ魚ナト乞ヘハ行ヒツト云ハコヽニテ海船ノヨセクル所ニテコレヨリハ都ニ入ヘキ悦ヒヲスル所ナリ仍テ米魚ナトヲ舟師ラノ乞ニマカセテ下行セルナルヘシ川ノ内ナレトコヽマテヲ海路トセン當今ノ定メナトアリタルナルヘシ

かくてふねひきのほるになきさの院といふところをみつゝ

ゆく

渚の院河内の國也今牧方といふ所の辺也

川ノ東ハ河内西ハコノアタリモ摂津國ナリ

大人云なきさてとこ
は川のひたしみきはく
河内の國之ひたしの名
いはれなく

その院むかしをおもひやりて見れは

しかおもひやるはたれし~~やりて見れは~~（そうりて後の詞え）

おもしろかりける所なりしりへなる岡には松乃

木ともあり中の庭には梅の花さけりこゝに

こゝに於是ニテコゝニオキテノ義ナリ

人ゝのいはくこれむかし名たかくきこえたる所也

故これたかのみこの御ともに故ありはらのなりひら

の中将の世の中にたえて桜のさかさらは春のこ

ころはのとけからましといふうたよめるところな

りけり

惟喬親王ハ文徳第一之皇子母紀静子名虎之

女故の字ハ亡人を云ヘ業平朝臣ハ阿保親王才五子

母ハ伊登内親王也貞観元年正月十五日任右兵衛中

将さくらの哥ハ古今集にはなきうりせえとみゆいせ物語

いま興ある人ところに似たる歌よめり

所に似あひたる歌之（興アル人ト云ハ人ノ中ニスクレテ興セル人ト云 即紀氏ナルヘシ）

ちよへたる松にはあれといにしへの声のさむさはかは

らさりけり

声のさむさはさびしくすさましき之

或人云龍ニカハリテ院ノアレタルナト思ナルヘシトイニシヘノ声
ノサムサハ巧得テメツラシナリ

またある人のよめる

きみこひて世をふるやとの梅の花むかしのかにそ

なほにほひけるといひつゝそ

君と惟喬みこを指たてまつる世をふる宿は渚の院之

みやこのちかつくをよろこひつゝのほる人ゝの中に

京よりくたりしときにはみな人の子ともなかり

きいたれりし国にてそ子うめるものともありあへ

る人みなふねのとまる所に子をいたきつゝおりのりす

これを見てむかしの子のはゝかなしきにたへ

すして

なかりしもありつゝかへる人の子をありしもなく

てくるかかなしさといひてそなきけるちゝも

これをきゝていかゝあらんかうやうのことも

（ナシ）かくのことゝもこのむとてあるにもあらさるへし

うきこのよくはなにまわしされつへし

おろかなるひとゝよむもはなれ思ひ堪ぬ時の

わさくとなるを

をるはしをとゝもなりふりにふたつぬとれのわさ

とか

（文言ヲ好ム世トナリテハ假託ノミノ詠歎ヲ玩ヘルヨリカクモワサ〳〵コトワリタルナリ詩哥トモニ思ノアマリノ歎辞ナルハ本ヨリナルヲ）

さなひ宇土野といふところにとまり給

（宇土野ハ川ノ西ニテ摂津国ヘ川シリヨリコヽフタトマリスルハイニシヘハコノ川ノ波路遠カリシト見ユ）

十日さはることありてのほらす

十一日あめいさゝかふりてやみぬかくてさしのほる

まひしのかゝふ山のよそほひをさして人ゝよくくも

やちよのこゑやといふたはをきゝて人ゝおかみたて

まつる

さて或本によるといひてとふ八幡宮ハ應神

天皇也初め肥後の國菱形の池の辺にたれしけるを

欽明天皇の御時神託によりて豊前の國宇佐の宮

に遷し奉りしを後清和天皇の御時大和の大安寺

の僧行教夢に感しまつりて山城國男山にうつし

まつりつるよしを奏聞しけるによりてすなはち

社祠をたてさせたまへり

山されのたしらうましきるゆうきりたし

拾芥抄大橋の部に云山崎今大渡歟とあり（川ノ東ニ今ハ橋本ト云里アリ山サキノ橋コヽニカケルナルヘシ舟ワタシ有是ヲ大ワタリト云）

さるは相應寺のほとりとよ

三代實録に山城の國乙訓郡相應寺者元是漁商比屋之地也往年權僧正壹演從水觀行橋頭遭天暑熱上岸風涼有一老嫗施舍献地壹演便在其中締作壇法經平地中得舊佛像因縁相應靈瑞頻現大政大臣歎其希有奏建道場即發工夫忽備輪遂定寺名以為相應宜賜四履永為寺堺東至橋道南至河崖西至作山北至大路云〻

しはし舟をとゝめてとかくさうしむるとゝかりて（京ニ入用意ナリ彼是ト定ムルナルヘシ）ひてゝゐきしのほとりをふ柳かおほくおりてゐる人ものゝ柳のうきれ川乃きこえてはれるをとこそるらめるらし

さゝ波よせてるひやをはる柳の郷のあしくたるかとうらむ

十二日やあさまにとまれて（山崎ハ當時舟泊ナルヘシ催馬樂ニ山嵜ノ筑紫津ト云ル章モ見エタリ筑紫ノ舟ノコヽマテノ入来ルユヘニ云カシラス）

十三日なほやまさきに

十四日あめふれりけふ車京へとりにやる

昔は西国に行人も京に上る人も山崎より舟に
のりあかりせしなり古今集大和物語なとにも見ゆ

十五日けふくるまゐてきたり

車をゐてきたるなり

舟のむつかしさに舟より人の家にうつる

むつかしとはむさくとせしなるへし

今俗ニムサクロシキト云詞ナリ

大人云此人の家とは京の内
の人にこそありて貫之の
やとれるをよろこふとはふ
か詞つゝきさる事なるいう
つし偏せしにや

此人乃家よろこへるやうにてあるしゝたり

あるしまうけは饗応ならん

貫之ノ宿ラレシヲ家ノ内皆挙リテ悦ヘルヤウナルヲ家ヨロコヘルト云歟

このあるしの又あるしのよきを見るにうたておも
ほゆ

又云はあるしは男なるへし
あるへし又のあるしとは
女あるし又のあるし又の下
この様せしとも也男
あるし妻人なるれは
まさの女なりしこときき
人するところふあふらう
ありける人この作ほ
からぬそ恥しくう
うそしといふなるや

はあるしは家主又のあるしは饗応なりうると
てはあのかさなるを家の義へはまのよくあへし
らふ又とてなしのゆへのよきを見るにあやしき
しまておいほつまと家の人の出入ことの
事をいへるにそもれも
いへの人乃いてりふくさなかしれいやゝかなり

いやゝかやくしく禮義正しき也
（京近クテ今容義進退ノ宜シキヲ含メテ各ルナルヘシ）

十六日はふようさうらうやこへ出かるついてよみける
（タツケテ京ヘ入ナト用意アルハ女児オホク波跡ノツカレニテミタリカハシキヲ人目ワルシミテナルヘシ）

やましろのこひつのさとも
ちひさき櫃めくものに絵を書て売の店ある
売しきや
海をきれたはちのかるもうちくさるはなる
和名抄粮餅形如藤葛也（和名万加利）たはちハ大餅なる

へし或人の拾乃庵訓に依尺ゑ餅と云あなり
山崎よそほしゐ貝の形する餅を浮上すしといふ
京へ出るすみとあり
（一本に山崎のたゞなる小櫃の絵も又かゝりのほしぬるもトアルモト有けれたはちハ大餅ナリトスナリト云ニモ似訓ぬ詞ん）
うち人のこゝろとろきよしぬとさいふなる
（カクセルハ人ノ心ノタノマレカタキヲ云ニテ下ノ文辞ニアハセシルヘキコアル其ノ編ナコヽニオコセシニヤ）
かくて京へいくに浮坂まてひとあるしまうるさ
嶋坂向日神社の南山崎の邑なるとあり
（山崎ヨリコヽマテ道ノ程幾ホトモアラスサレハ此ニアルシトハ一夜ヤトルニハアラテ都ノ人ノコヽマテ坂迎ヘニ来テ饗スルナルヘシ夜ニナリテ都入セムト思ヘハ急モセヌト云ニ見ルヘシ）

大人かくいへるを
此山崎乃里人のゐまへ
おもてうくおわつけて
ふ瑞の人の心のあるの
ところかひなきとうふ
つき娼をこゝろ逝
上るの事いかゝるすし
又ぶ此ハまし水う
まや与とみて歩るら
京へて主人とられあ
ひてそれしゝ価復

ゐしもて来て答へ
するなへし

かつらはしもゆかしきわたりぞ

こはなにつく詞へ住国におもむく時はうと
かろし人も今の人も来る河となれと追従の
そしきもたのつらし人ゝにはゆるをよろこぶぬめ
さなりとゝかゝれたれ

たちてゆかしとおもへる人はさあらく
あるはなにさまもかつらとす夜になしては
こやうにならんと思へはいそきしもせぬほとに
月いてぬかつら川月のあかきにそわたる人ゝのい
はく此川あすか川にあらされはふちせさらにか

もしさるをみといひくはる人のよめるうた
久かたの月におひたるかつら川そこなるかけもかは
らさりけり又ある人のいへる
あまくものはるかなりつるかつら川袖をひてゝも
わたりぬるかな

天くものよそといひくらしたれは大空のごとく
になる月の桂を名におふ川に袖をひてゝ
しるすも渡るなん

又ある人のよめる
かつら川わか心にもかよはねとおなしふかさに

なかるつしなかも

涙さへ京よりかへつし悦のふかさまや又悦ひ
の涙れも川のなかれもおなしふかさよ流す
となるへし

こゝやむかしのうましきはまりようこともはまりそれは
うふ東ふけてとふらくと見つれこやこふいり
たちてしうましう敷よいろりて門よいるよ日あまけ
まいつとよしあやさまよ西まうしずりも海してふ
うひなくえさ日まやふれふする家とひつけたちふ
る人のこゝろもひまりするなりふさとなるのかよところあ

大人こゝさすやまと
とふえ色乃屋を
ぬようつしおくり

まひとりへのやうなれも結ひてあれかれ
ふなり

隣家の姉さんはあさよりゆきて結ひえ
を孫をたまさことよりのいたえんえさせたるさまを
ひつ家おいとしこいたうなもいそせん
かくはれつるるすと家人らよおよそるふいそせ
に隣の人乃ゆすとてんつうひたるえ
いとつしく西まい（今あるえ見あれとも）
あれうし人の志うるまり
さいつさしいせんとす

何事モ心ツカヌサマニテ返報ハセントス（イト）寵恥ナクスルヲ見テ
ツカク心ツカヒシタマヘル紀氏ノ人カラナリ

さて池めいてくほまりて水つけるところあり ほとりに松も
ありき五とせむとせのうちに千年やすきにけん
かたへはなくなりにけり いまおひたるそまじれる大かたは
みなあれにたれはあはれとそ人々いふ この家
にてうまれし女子のもろともにかへらねは
いかゝはかなしき

（いかゝはかなしきハイカハカリ悲シキソトミツカラノウヘヲ云ナリ）

大人云舟人とハひとつ
わたり舟子ホ[illegible]
[illegible]紀の
文体にて言を畧
きてこゝろえ難き所多し

ふな人もみな子たかりてのゝしる
舟人もハ舟にて来りし人なるへし子たちの
手はいたきてえかゝりのゝしる　或本によみつゝけてとあり

舟人ハ舟ニ乗テ来リシ人ナルヘシト云注従ヘカタシカク舟人ト云テ
テハ二ワタリ舟士ラノコトニ心ナサルレト舟ヨリ上リテ来リシ人ト云義ニヤ
此記ノ文体アマリニ言ヲ略キタルヤウナル所々多ケレハコヽモ尓意
得テアランカ子タカリテハ森タカリ扱ナト云人モアリケレト一本ニ子
イタキテトアルニ合ヌ私言ナレハ論ニモ足ヌコトナリ

かゝるうちに猶かなしきにたへすしてひそかに
こゝろしれる人といへりける

大人いはく彼もし紀に云し
大伴の卿旅人此君の還入
故郷家即作哥三首
人もなきむなしき家は
草まくら旅にまさりて苦しかりけり

紀氏夫婦ノコヽロナルヘシ

うまれしもかへらぬものをわかやとにこまつの
みるかかなしさとそいへる

されのさいとそは今せきてるも侮しきると

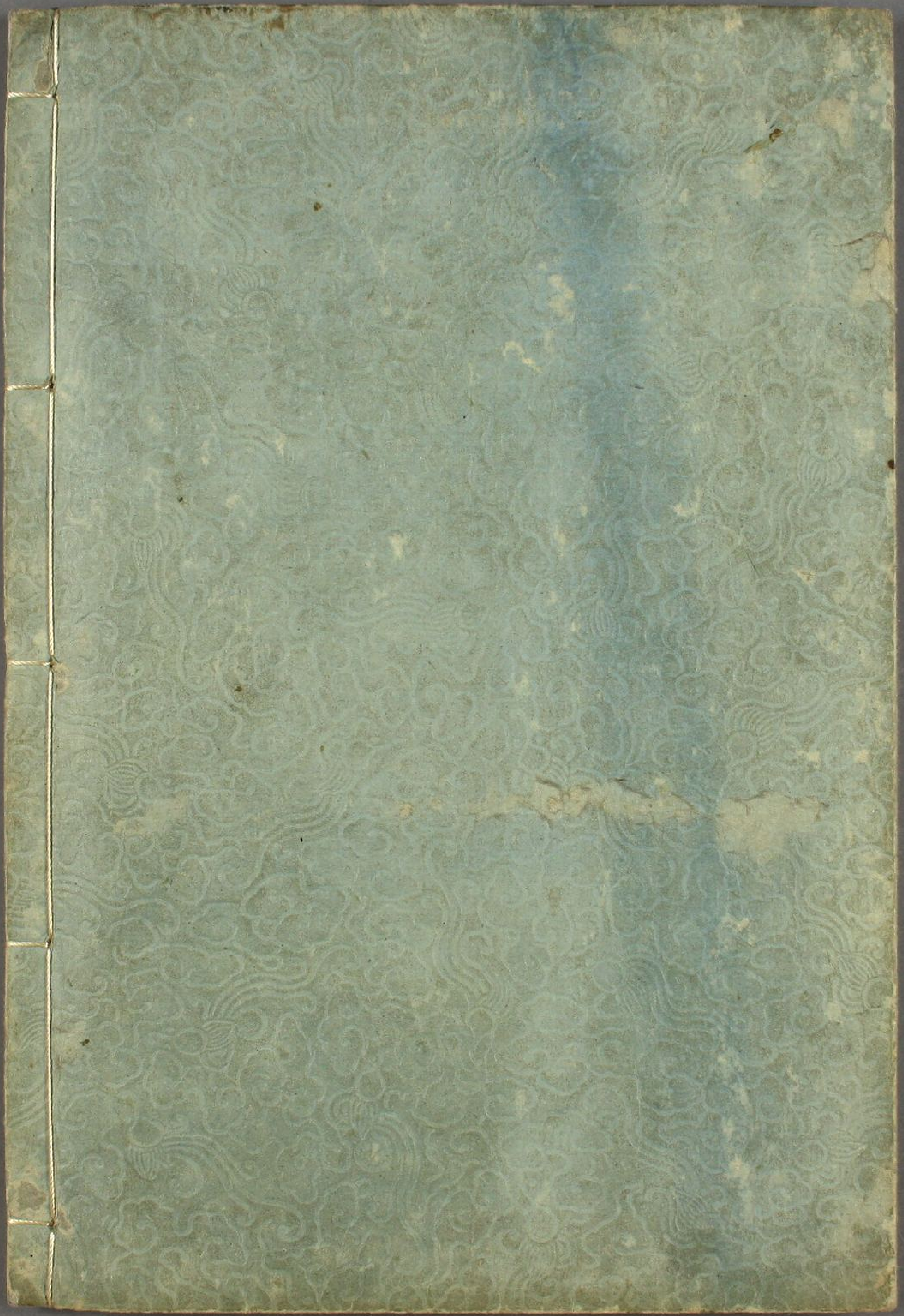
妹とてやすらつひに
家へ（八木高）うへけく
まよひけるも

わきもこかうゑし
梅の木ふみにとふらひ
むせひなきしかは

見は妻をてしまく
なひしくはいはん土左を
かをしらをとられしく
ちとせ似るなけ
さるれを昔と思ひ
出くあかしかりしに
ゆかのこもふくかいて
しとつても紀氏を
おほくやかてかりて
ふしへと見ゆるか
ちる人のうたへ

いはあはせらるへし
なほあかすやあらんまたかくなん
見し人のまつのちとせにみましかはとほくかなし
きわかれせましや
とこそおもひおもへ
わすれかたくくちをしきことおほかれとえつくさす
とまれかうまれとくやりてん
破捨んとは人に見すつまあるへけれと
（上ニ補注アリ）
又云彼れもてをます男もすなるをてめしきと和とするそのうちの人ころはいふそめしと
いはんせのことならひとかたはけつさしをとかり

明和のとしふみ月廿日まりてぬかのひに
みやこにてこと世にとみさかれおりひたち
きるはいつくへこともしるにおもほしますを
えなんうみさとみなよはさるにゝをとふとし
ころやかりゐ東なる大城なるれいと戸西のかた小屋
みかはたのみてをおかしやかておいたらぬなと
かりかへありしめはへしつまはしの
宇萬伎

温古